

研 究

アトピー性皮膚炎のステロイド外用療法に関するアンケート調査

—— 患者の希望，皮膚科医の考え

浜松赤十字病院 皮膚科

小出まさよ

和歌山県立医科大学 皮膚科学教室

古川福実

浜松医科大学 皮膚科学教室

瀧川雅浩

要 旨

アトピー性皮膚炎患者118例にステロイド外用剤に関するアンケート調査を行った。およそ85%の患者は、処方されている外用剤についての概要を認識していた。ステロイドという言葉を知らない患者も8%いた。約20%の患者はステロイドを使用したくないと考えており、5%は極めて怖い薬と思っていることが分かった。また皮膚科医56名に治療方針につきアンケートを行った。約80%が半分以上の症例にステロイドを第一選択薬としていた。全く使用しない医師はいなかった。皮膚炎の改善時、増悪時いずれも薬効ランキングに従って変更していく医師が70%をしめた。ステロイド忌避の患者に対しては約60%が充分に説明して使用しており、34%は使わずに治療していた。アトピー性皮膚炎は慢性の疾患ゆえにステロイド外用剤使用の際は十分注意し、より一層の患者への説明が大切と考えた。

Key words

アトピー性皮膚炎，ステロイド外用剤，アンケート調査

アンケート調査したのでこれを報告する。

はじめに

アトピー性皮膚炎に対してステロイド外用剤は有効で私たち皮膚科医は主に第一選択薬として使用してきた。しかしながら本症、特に成人のアトピー性皮膚炎ははきわめて慢性であり、かつ顔面を含む広範囲の皮膚をおかすことが特徴である。ステロイド外用剤の不用意な使用によってさまざまな副作用が生じ、その頻度は1~10%¹⁾と報告されている。また、近年ではステロイドの副作用が各種マスコミに取り上げられ、その結果ステロイド外用剤に極度の恐怖を抱いたり、忌避を求める患者もみられるようになった。そこでわれわれは皮膚科に通院中のアトピー性皮膚炎患者にステロイド外用剤について簡単なアンケート調査を行った。また、日本皮膚科学会静岡地方会の際、皮膚科医に実際のステロイドの使用状況等をアン

I. 調査対象とその方法 (患者群)

浜松赤十字病院，遠州総合病院，県西部浜松医療センター，聖隷浜松病院，浜松医科大学付属病院，浜松労災病院の皮膚科に通院あるいは入院中のアトピー性皮膚炎患者を調査対象とした。アンケートの内容は表1如くであり、それぞれの病院の皮膚科専門医が無作為に配布し回答を得た。対象となった患者は男57例，女61例で合計118症例，年齢は男は0~42歳，女は0~46歳で平均年齢はいずれも20.5歳だった。

I. 調査結果 (患者群)

I-1 ステロイドという言葉の知識について (図1)

表1
アトピー性皮膚炎のステロイド外用療法に関するアンケート調査票 (アトピー性皮膚炎患者用)

あてはまるものに○をつけて下さい。

- 年齢 歳 (男, 女)
1. ステロイド (副腎皮質ホルモン) という言葉を知っていますか。 (はい いいえ)
 2. あなたが使っている塗り薬は, ステロイドか否かわかりますか。 (はい いいえ)
 3. あなたが使っている薬は, 薬によって塗る場所の違い (例えば顔とか体とか) がわかりますか。 (はい いいえ)
 4. 塗り薬は医師の指示通りに塗っていますか。 (はい いいえ)
 5. アトピー性皮膚炎のためおよそどのくらいの割合で病院にかよっていますか。 (1回/2週間, 1回/1か月, 時々)
 6. 現在かよっている科以外でステロイドの塗り薬を処方してもらうことがありますか。 (市販薬も含む) (はい いいえ)
 7. ステロイドの塗り薬の印象はいかがですか。
 - a 病院で処方されるものは安全
 - b よく効くが多少副作用が心配
 - c 少し使っても副作用が強く怖い薬
 - d わからない
 8. ステロイドの塗り薬を使うことに関してご意見を聞かせて下さい。 (使いたくない. 症状にあわせて使用したい.)
 9. 8で, 使いたくないと答えられた方のみお答え下さい。ステロイドの塗り薬のどのようなところが心配ですか。不安なことを記入して下さい。

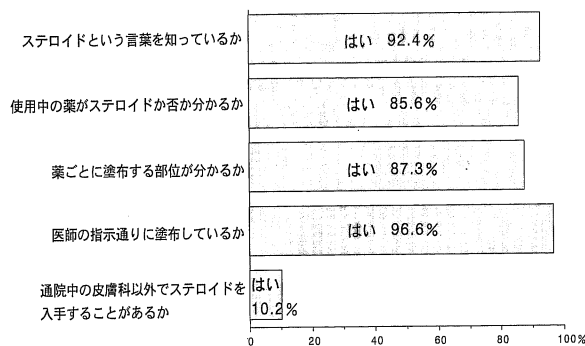


図1 アトピー性皮膚炎患者のステロイド外用剤に関するアンケート結果

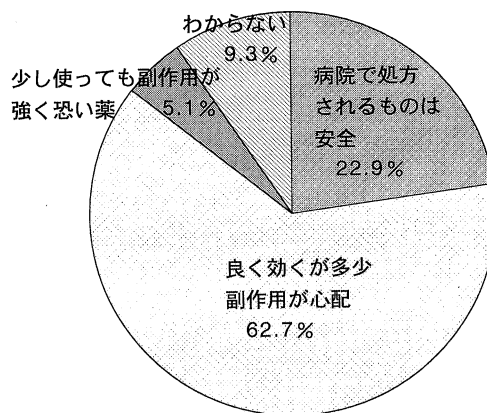


図2 ステロイド外用剤の安全性に対する印象

ステロイド (副腎皮質ホルモン) という言葉を知っていたのは, 118人中109人, 92.4%で, 9人 (7.6%) はこの言葉を知らないと回答した。

I-2 自分が使用している外用薬について

(図1)

自分が使用中の外用薬がステロイドかそうでないかわかっている人は118人中85.6%で, 14.4%はわからなかった。

I-3 部位別に外用剤を塗り分けているか

(図1)

アトピー性皮膚炎の場合, ほとんどの患者がいろいろな部位に皮疹が出現している。皮疹の部位, 皮膚病変の範囲, 性状, 患者の年齢, 合併症を考慮し適した外用剤を処方するのが一般的である²⁾。

今回の調査では118人中87.3%が部位別に塗り分けていて, 12.7%は部位別の塗り分けがわからなかった。

I-4 外用薬は医師の指示通りに塗布されているか

(図1)

使用部位, 使用頻度などわれわれ皮膚科医は外用薬を処方する際指示事項を説明している。今回のアンケートでは118人中4人 (3.4%) の患者が指示通りに塗っていないと回答した。

I-5 ステロイド外用薬の入手方法について

(図1)

10.2% (12人) の患者が現在通っている皮膚科以外 (市販薬も含む) でステロイド外用薬を処方してもらっていた。

I-6 ステロイドの塗り薬の印象について

(図2)

よく効くが多少副作用が心配と考えている患者がもっとも多く62.7%を占め、病院で処方されるものは安全と思っている患者は22.9%、わからないが9.3%を占めた。一方、少し使っても副作用が強く怖い薬と思っている人は6人いて5.1%であった。

I-7 ステロイド外用剤を使うことに関して

(図3)

この設問は回答を使いたくないと、症状にあわせて使用したいの二者択一にした。症状にあわせて使用したいと考えている患者は78.6%であったのに対し、21.4% (25例) が使いたくないと答えた。受診頻度別にみると、2週間毎に通院している患者群では29%が使用したくないと答えており、1ヶ月に一度通院している群では使用したくない頻度は18%、時々しか通院しない群では11%が使用したくないと考えていた。

I-8 なぜステロイドを使用したくないか

リバウンドが怖い、だんだん効果がなくなる、幼い頃使用していて皮膚が黒く硬くなってしまった、一生塗り続けなければいけない、良い薬ではないなどの回答が得られた。

II. 調査対象とその方法 (皮膚科医群)

実際にアトピー性皮膚炎の治療に当たっている皮膚科医の治療方針、ステロイドの使用状況について調査した。第58回日本皮膚科学会静岡地方会に参加した皮膚科医のうち56名からアンケートが回収できた。アンケートの内容は今村ら³⁾を参考にし表2に示す如くにした。

II. 調査結果 (皮膚科医群)

II-1 ステロイド外用剤の使用頻度 (図4)

全症例に第一選択薬として使用している医師が13%、約3/4の症例に使用している医師は43%、約1/2の症例に使用している医師は25%、約1/4あるいはそれ以下は14%だった。全く使用しない皮膚科医はいなかった。複数回答分はその他とした。

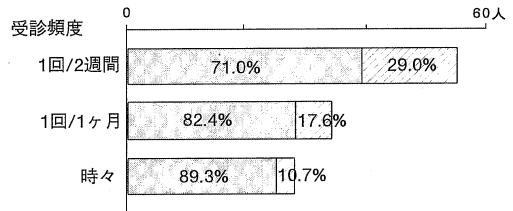
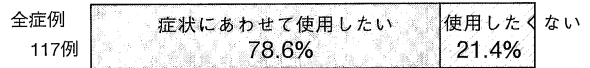


図3 ステロイド外用剤を使用することに関して

表2

アトピー性皮膚炎のステロイド外用療法に関するアンケート調査票 (皮膚科医用)

先生のアトピー性皮膚炎の治療方針、考え方に合うものに○をつけて下さい。

- 1) ステロイド外用剤の使用について。
 - a 全症例にfirst choiceとして使用している
 - b 約3/4の症例にfirst choiceとして使用している
 - c 約1/2の症例にfirst choiceとして使用している
 - d 約1/4またはそれ以下の症例にfirst choiceとして使用している
 - e まったく使用していない
 - f その他 ()
- 2) 治療により、皮膚炎が改善した場合のステロイド外用剤の使用法について。
 - a 同じ製品を、塗布回数を減らして使う
 - b 同じ製品を、白色ワセリンなどでうすめて使う
 - c 薬効ランキングのより低い製品に変えていく
 - d 非ステロイド系消炎外用剤に変更する
- 3) 治療で皮膚炎の改善がみられない場合のステロイド外用剤の使用法について。
 - a 同じ製品を、塗布回数を増やして使う
 - b 薬効ランキングのより高い製品にかえる
 - c ステロイド内服を行う
 - d その他 ()
- 4) ステロイド外用剤を使用したくないという患者が来院した時にはどのようにされますか。
 - a ステロイドの作用、副作用を十分に説明して使うようにする
 - b ステロイドを使わずに治療する
 - c 他医を受診するように勧める
 - d その他 ()

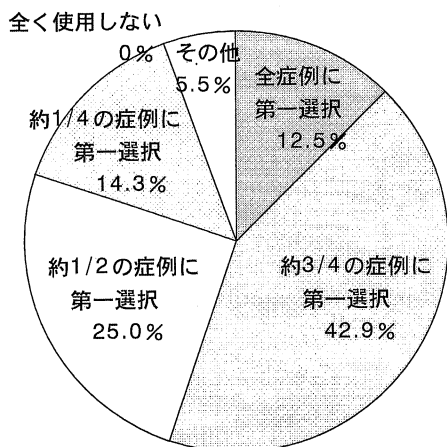


図4 ステロイド外用剤の使用頻度

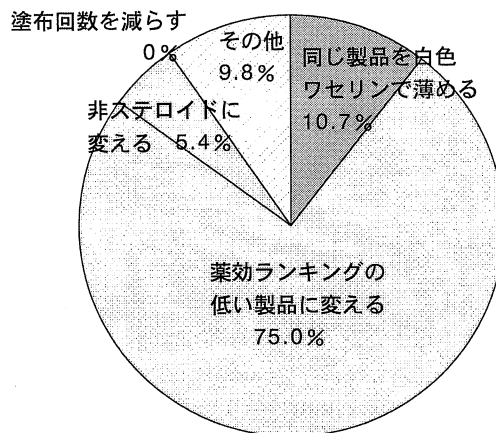


図5 皮疹改善時のステロイド外用剤の使用法

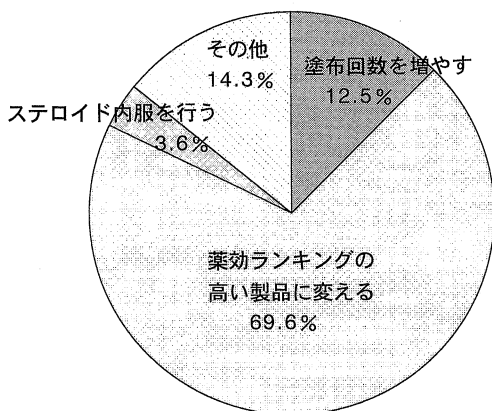


図6 皮疹が改善しない場合のステロイド外用剤の使用法

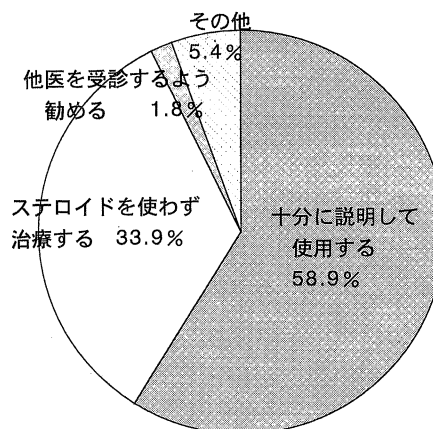


図7 ステロイド忌避患者への対応

56%の皮膚科医は大部分の症例にステロイド外用剤を第一選択として使用しており少数の限られた症例にのみ使用している医師は14%であった。

Ⅱ-2 治療により皮膚炎が改善した場合のステロイド外用剤の使用法 (図5)

改善した場合は薬効ランキングのより低い製品に変えられる医師が75%と最も多く、同じ製品を白色ワセリンなどで薄めて使う (11%)、非ステロイド系消炎外用剤に変える (5%) の順であり、同じ製品を塗布回数を減らして使う医師はいなかった。

Ⅱ-3 治療で皮膚炎の改善がみられない場合のステロイド外用剤の使用法 (図6)

治療しているにも関わらず皮膚炎が改善しない場合は、薬効ランキングのより高い製品に変える医師が最も多く70%を占め、同じ製品を塗布回数を増やして使う医師は13%、ステロイドを内服させる医師が4%と続いた。その他の回答としては、抗ヒスタミン剤などや漢方の内服を追加したり、原因究明につとめるなどの回答が得られた。

Ⅱ-4 ステロイド外用剤忌避患者への対応

(図7)

ステロイドの作用、副作用を十分に説明して使うようにする医師が59%でステロイドを使わずに治療する医師は34%だった。また、他医を受診するようすすめる医師も2%みられた。

まとめと考へ

浜松赤十字病院，遠州総合病院，県西部浜松医療センター，聖隷浜松病院，浜松医科大学付属病院，浜松労災病院の皮膚科に通院あるいは入院中のアトピー性皮膚炎患者118例にステロイド外用剤に関するアンケート調査を行った。

その結果，およそ85%の患者は，処方されているステロイド外用剤についての概要を認識していた。ステロイドという言葉を知らない患者も7.6%いた。約20%の患者はステロイド外用剤を使用したくないと考えており，5%は極めて怖い薬と思っていることが分かった。頻りに通院している患者群のほうがステロイドを使用したくないと考えている傾向があった。

また，第58回日本皮膚科学会静岡地方会に参加した皮膚科医56名にアトピー性皮膚炎の治療方針につきアンケートを行った。

約80%の医師が半分以上の症例にステロイド外用剤を第一選択薬として使用していた。ステロイドを全く使用しない医師はいなかった。今村ら¹⁾の報告によると83%の皮膚科医は大部分の症例にステロイド外用剤を第一選択として使用しており，少数に限られた症例にのみ使用しているか全く使用しない医師は4%であった。また，川原ら³⁾の報告でも皮膚科医は73%がほぼ全例に使用し，全く使用しない医師はいなかった。今回のわれわれの調査でも同様の結果が得られた。

皮膚炎の改善時，増悪時いずれも薬効ランキングに従って外用剤を選択し変更していく医師が70%をしめた。

ステロイド忌避の患者に対しては約60%が十分に説明して使用しており，34%の医師はステロイ

ドを使わずに治療していた。今村ら¹⁾の報告では，十分に説明してしようとするものが53%，使わずに治療するものが52%でほぼ同数であった。最近，厚生科学研究の分担研究（分担研究者代表者：山本昇壯広島大学教授）としてアトピー性皮膚炎の治療ガイドラインが決定された。その概要は1 診断，2 重症度の評価，3 原因，悪化因子の検索と対策，4 スキンケア（異常な皮膚機能の補正），5 薬物療法からなる。皮膚炎における炎症の抑制には原則としてステロイド外用剤は必要であり，今回の調査でも多くの皮膚科医はアトピー性皮膚炎に対しステロイド外用薬は有用な薬剤と考えていることが分かった。しかし誤った使用方法では副作用を起こすことがあり現在一部マスコミ，あるいはアトピービジネスの影響でその副作用が誇張され混乱が生じていることも事実である。

日常診療においてステロイド外用剤を使用する機会が多いわれわれ皮膚科医は，ステロイド外用剤使用に当たって十分な注意が必要であり，その際患者に対する説明，指導を一層怠らないようにすることが大切だと考えた。

文 献

- 1) 今村貞夫，上原正巳，安野洋一．アトピー性皮膚炎のステロイド外用療法に関するアンケート調査．皮膚科紀要 1995；90：381-387.
- 2) 原田昭太郎．副作用を最小限に抑えるステロイド外用剤の使用法．臨床皮膚科 1993；47(5増)：121-125.
- 3) 川原繁，谷内江昭宏，竹内和彦．小児アトピー性皮膚炎の診断，治療および民間療法による悪化例に関するアンケート調査．日本皮膚科学会雑誌 1999；109：1431-1438.